

◆**単元名:**第3章 私たちの暮らしと民主政治 2節 三権分立のしくみと私たちの政治参加

言葉で伝え合おう 「もしも裁判員裁判に参加したら ～シミュレーション」(教科書 pp.110-111)

◆**本時の目標:**事例をもとに、自分が裁判員裁判に参加したとして判決を考える活動を通し、裁判の意義について理解する。／裁判に関わる人々の役割を理解し、その重要性に気づく。

□指導にあたって:

本特設ページでは、自分が裁判員に選ばれたつもりで、ある事件について考察を深める「シミュレーションの進め方」を紹介している。「深夜の恐喝、強盗事件」という事例を題材に、被告人にどの程度重い罪を適用すべきかの判断を、弁護士、検察官の主張と証拠を照らし合わせて考える活動となる。シミュレーション学習を通して、多様な見方・考え方や価値観をふまえた判断力と、自分も将来裁判に参加する可能性があることを意識させたい。

□一人一人で判決について考察していく展開例:

～事前の準備

- ・シミュレーションの状況設定を確認する。【事件のあらまし】を読み、事件のイメージを明確にする。
- ・事実設定を確認する。【証拠】を読み、事件について明らかになっていることを確認する。

●ステップ1〈弁護士と検察官のどちらの主張が妥当か、評価する〉

- ①犯罪の可能性を確認する。この事件で成立する可能性がある犯罪として、傷害罪(刑法 204 条)、恐喝罪(刑法 249 条)、強盗致傷罪(刑法 240 条)があることをおさえる。
- ②教科書 p.110 に掲載の資料「刑罰の種類」を確認し、主な刑罰の種類と概要を理解する。弁護側と検察側の主張の違いを比べるために、比較対象の一つとして刑罰に着目させたい。
- ③弁護側の主張を検討する。資料から弁護側の事件解釈、刑罰要求根拠を理解し、「被害者 B さんが反抗できないほどの暴行や脅迫があったといえるか」について検討する。
- ④検察側の主張を検討する。資料から検察側の事件解釈、刑罰要求根拠を理解し、「被害者 B さんのけがは、強盗の際に負わされたものといえるか」について検討する。

●ステップ2〈判決を決定し、理由とともに説明する〉

- ①事件の状況、証拠、弁護側・検察側の主張から考察し、判決を決める。検討時には、「答えは一つではなく、同じ事件でも解釈は分かれことがある」ことや、「話し合いの途中で、他者の意見を参考に自分の意見を変えても良い」ということを確認したい。

記入欄の例:

- 傷害罪と恐喝罪(執行猶予付き) [弁護側の主張通り、現場の状況から、逃走する際に偶然ぶつかってけがをしたと考えられる。暴行するつもりはなく、現金が目的だったので。]
 - 強盗致傷罪 [検察側の主張通り、けがは一連の強盗行為の影響によるものだと考えられる。こうした悪質な事件を撲滅するためにも、厳罰に判決を下したほうがよいと思う。]
- ②判決を発表し、質疑応答を行う。クラス全体で疑問点やそれに対する回答なども含め、話し合い活動を行う。
 - ③シミュレーション学習後のまとめと振り返りを、クラス全体で行う。自己評価、学習者同士の相互評価、授業者による評価、第三者による評価など、組み合わせて実施することにより、客観性、妥当性、説得力のある振り返り活動としたい。物事を多面的・多角的に見て考察し、自分自身の意見をもつことの大切さを認識させ、他者との意見交換を通して、より適切な結論を導き出す過程を実感させたい。